童話

お魚と眼鏡

内山憲尚

×

あつい　あつい夏のことです。

正夫さんは大學のお兄さんにつれられて海水浴に行くことになりました。新しい海水着を買つて貰つたので、うれしくてうれしくてたまりません。汽車の中から

「兄さん、海はまだなの？」

と聞きます、「もう一時間ばかり乘らなければ駄目だ」又暫くすると

「兄さん、海はまだなの？」

とうるさい位に聞くのでした。

やがて海へ着きました。正夫さんはいきなり、裸體になつて、新しい海水着を着まして兄さんがまだ仕度をしてゐらつしやる間にもう、波打際へ飛び出して行きました。

海の波は正夫さんが考へてゐた樣に靜かではありませんでした。高い波の音を聞きながら立つてゐる後へ兄さんが來られて、

「正坊、今日は少し波が高いぞ」

と云はれました。

正夫さんは、なんだか恐くなりましたので「兄さん、僕お山作つて遊ぶよ」

と云ふと兄さんは笑ひながら

「折角、新しい海水着を買つて貰つたんだからお入りよ、兄さんが、一緒に行つてあげるよ、これ位の波に怖がつては日本男子とは言はれないぞ」

「だつて——僕！」

「さあ、來るんだよ、そらあんな小さい子供でも入つてゐるぢやないか、大丈夫だよ」

「入るよ、入るよ、僕だつて日本男子だもの」

「よーし、偉いぞ、さあ行かう」

兄さんは、正夫さんの手をとりました。その時正夫さんは兄さんの顏を見ますと、いつもの通り眼鏡が光つてゐます。

「兄さん、眼鏡かけて入るの」

「あゝ、眼鏡をとるとよく見えないから、正ちやんを見失ふとこまるだらう——さあ行かうよ」

正夫さんは兄さんに手を引かれだんだん深いところまで參りました。

「さあ兄さんが、手を持つてあげるから、足をばたばたして、泳ぐ稽古をして御覽」

兄さんは、正夫さんの手をしつかりと持ちました。恰度その時です、大きな波がぢやぶんと來たかと思ふと、正夫さんと、兄さんの顏を横の方から、いやと云ふ程たゝきつけました。

「しまつた！」

「兄さんは大きな聲で呼びました。兩方の手で、顏をすらりとなでた、兄さんの

眼には今まであつた眼鏡がなくなつてゐました。今の横波で眼鏡が外されて、海の中へ落ちたのです。兄さんは、細い眼をして海の中を一生懸命にさがしましたが、どうしても眼鏡は見つかりませんでした。

仕方なしに眼鏡なしで家へ歸つて來ました、さあ海の中へ落ちた眼鏡はどうなつたでせう。

×

さつと寄せて、眼鏡を外した波は、さらさらと、引いて行きます。その時に正夫さんの兄さんの眼鏡を一緒に海の底の方へ持つて行つて仕舞ひました。

眼鏡は、白い海の底の砂の上に、靜かに休んでゐました。そう深くもないところなので海の上からの光がかすかに通つて來ます。二つの目玉はその光を反射して白く光つて居りました。

小さい鰯の子供たちが六七疋で散歩をしてゐますと、岩の横の砂の上から二つの大きい目玉がピカリと光りました。驚ろいたのは鰯の子供たちです。

「お化け！」

一目參にお母さんのところへかけつけて來ました。

「お母さん、お化けがゐますよ」

「どこにゐるの」

「岩の前のところの砂の上に、二つ大きい目玉をして、僕たちをにらんでゐたんだよ」

「そんなものがゐるものですか、よろしいお母さんが行つてあげませう」

子供に案内されて來て見ますと、お母さんも見たことのない、不思議なものです。

「おや、これは、一體なんだらうな」

「お母さん、お化けぢやない」

「お化けぢやないけれども——なんでせうな——そうです、これは二人乘りのブランコですよ、ね、そのまがつたところを樹にかけてぶらぶらゆするんですよ」

「なる程、お母さん、吊つてよ」

と云つてゐるところへ、章魚さんがのそいてのそりとやつて來ました。

「どうかしましたか、鰯さん」

「章魚さんですか、恰度いゝ處へ來ましたね、そーら、こんなぶらんこが落ちてゐたから、子供たちに吊つてやらうかと思つてゐたところですよ」

「なに、ぶらんこ、どれですか」

「二人のりのぶらんこ」

章魚は眼鏡を見て、笑ひ出しました。

「これはぶらんこぢやありませんよ」

「へエ、ぶらんこではありませんか」

「そうですよ」

「では何んですか」

「これはネ、お窓ですよ」

「窓ですつて」

「そうです、君たちには要らないが、僕等の樣に岩と岩との間に棲んでゐるものにはこれが必要なのです、この透き通つて見えるのをガラスと云ふのです」

「なる程」

「これは、僕が貰つて歸りますよ、そして家のお窓にしますから」

章魚は足を二本のばして、眼鏡をまきつけました。

そこへ通りかゝつたのが、赤い顏をし

た鯛でした。

「どうしたんだね」

「ヤア、これは鯛さんかい、實はこんなものが落ちてゐたんだよ、お窓に恰度いいから僕が貰つて歸らうと思つて引つぱつて歸るところだよ」

「なんだ、それはお窓ぢやないよ」

「ぢや、一體なんだね」

「それは人間のかける眼鏡と云ふものだよ」

「眼鏡！　眼鏡つて何をするものだね」

「遠くの方が、よく見えない人がかけるものさ」

「さうか、なる程、それで二つガラスがついてゐるんだね」

「二人乘りのぶらんこかと思ひました」

鰯のお母さんは一人で笑つてゐました。

「これを落した人間は、さぞこまつてゐることだらうよ」

と云つてゐる處へ蟹がやつて來ました。

「蟹君が來たぞ、蟹君はよく波打ち際の方へ遊びに行くから知つてゐるかもわからないよ」

鯛は蟹が近づくのを待つて尋ねました。

「蟹君、海水浴で眼鏡をなくしてこまつてゐる人間を知らないかね」

「眼鏡だね、あゝ、そうだ、正夫さんとか云ふ可愛いゝ子供の兄さんが眼鏡を波にさらわれてこまつてゐたよ」

「ぢや、きつと正夫さんの兄さんのだね」

「そうだらう」

「氣の毒だね」

「では僕が持つて行つてあげやう」

蟹が力強い聲で申しました。

「さうか、それはありがたい」

「いや、蟹さんたのむよ」

×

翌る日の朝は正夫さんの兄さんは眼鏡がないので表へも出られないと云つてお家で寢ころんでゐました。

正夫さんは一人で朝早くから、新しい海水着を着て波打ち際をかけ廻つてゐました。

すると、白い貝殼で丸く輪が作つてあるのが見つかりました、『おや、誰かの惡戯かな』と思ひながら近づいて見ますと、その丸い輪の中に何んだかピカピカと光るものがあります。

「おや、眼鏡だ！　兄さんの眼鏡だ！」

正夫さんはそれを持つて、一目參に家へ歸つて來ました。

お晝からは正夫さんと兄さんの元氣な水泳姿を見ることが出來たでせう。

お母さまに

このお話を暗記するのは大變でせう。お子さんの前で、讀んで上げて下さるといゝと思ひます。讀んでやるのは氣がきかないなんて思つてはいけません。讀み方だつて中々むづかしいですからね。併し朗讀家ではないのですから、そんなに上手でなくていゝでせう。たゞ熱心にね。

（記者）